

【論文】

コロナ禍における沖縄離島観光の現在と未来 —海外のビーチリゾートと比較—

The Present and Future of Tourism in Okinawa's Remote Islands during the COVID-19 pandemic
: Comparison with Overseas Beach Resorts

圓田 浩二⁽¹⁾
Koji MARUTA

専門分野：社会学

要約

本稿の目的は、コロナ禍における沖縄離島観光の現在と未来について、インタビューやフィールドワークを用いて、その現状を把握し未来の観光について予測することにある。調査地は、沖縄県の座間味村と宮古島、石垣島である。新型コロナウイルス感染症の流行によって沖縄の離島観光が被った影響と現況を把握する。そして、日本国内の都心部と田舎の観光の状態を調査する。また、海外の有名ビーチリゾートであるタイ王国のサムイ島とプーケット、アメリカ合衆国ハワイ州オアフ島の観光と新型コロナウイルス感染症の対策を紹介し、比較する。結論は、2023年には新型コロナウイルス感染症の対策が大幅に緩和されるので、沖縄県の離島観光は2018年や2019年頃に戻るのではないかというものである。

キーワード：沖縄、離島観光、コロナ禍、ビーチリゾート、感染症対策

Abstract

The purpose of this paper is to understand the present situation and predict the future of tourism in the remote islands of Okinawa during the COVID-19 pandemic, using interviews and fieldwork. The survey sites are Zamami Village, Miyako Island, and Ishigaki Island in Okinawa Prefecture. The impact of the COVID-19 pandemic on tourism in the remote islands of Okinawa and the current situation are assessed. We also investigate the state of tourism in urban areas and rural areas in Japan. In addition, we will introduce and compare tourism and COVID-19 measures in Thailand's famous beach resorts of Koh Samui and Phuket, and Oahu, Hawaii, USA. The conclusion is that the measures against COVID-19 infection will be greatly eased in 2023, so that tourism in the remote islands of Okinawa

(1) 沖縄大学 法経学部法経学科教授。

Prefecture will probably return to around 2018 or 2019 levels.

Keywords: Okinawa, Tourism in the remote islands, pandemic of COVID-19, beach resort, infection control

1. 沖縄離島観光はコロナ禍から回復したのか？

本稿の目的は、2020年2月から始まった世界規模でのコロナ禍において、沖縄離島観光に焦点を当て、観光業の回復がどの程度まで成されたかのかという問題を考察する。また、日本の大都市・東京の観光の現状と、九州の田舎の観光地・高千穂について行った調査と比較する。そして、日本国内だけではなく、海外の有名観光地・タイ王国サムイ島とアメリカ合衆国ハワイ州オアフ島、タイ王国プーケットのコロナ感染症対策や観光客の行動について、比較検討する。

調査方法は、座間味村と宮古島、石垣市の沖縄離島観光については担当部門へのインタビュー調査を行った。また、東京都内と宮崎県高千穂、タイ王国サムイ島、アメリカ合衆国ハワイ州オアフ島、タイ王国プーケットではフィールドワークを行った。

2. コロナ禍の沖縄離島観光の状況

2-1. 座間味村

2022年12月29日に、座間味村役場船舶・観光課で、座間味村の観光の現状と2022年の入域観光客数を尋ねた。2022年は11月までで73,008人となっており、2021年の47,687人を大きく上回っている。2020年が50,849人であることを考えれば、コロナ禍における入域観光客数の約半分となったような大幅な減少は見られなくなった。2015年から2019年まではほぼ10万人前後であったので、2022年は約4分3秒までに回復したことになる。特に8月と11月は2019年の同時期を上回っており、2023年は約10万人前後を見込めるくらいになるだろう。観光客回復に向けて、東京モノレールで広告を打つなどを行っている。

2-2. 宮古島市

2022年12月6日に、宮古島観光協会で、宮古島市の観光の現状と2022年の入域観光客数を尋ねた。2022年4月から10月までの6ヶ月で435,110人となっており、年度で計算すれば2020年度の359,592人と2021年度の435,262人を大きく上回るだろう。宮古島への入域観光客数は、2018年に1,143,031人、2018年に1,061,323人となっており、2020年度の入域観光客数は過去最高であった2018年度の約3分の1まで激減したが、2016年度の703,055人と比較して考えると、2022年度は2018年の3分の2程度の約70万人まで回復するだろうと見込まれる。2023年度には新型コロナウイルスの感染症法上の「2類相当」から「5類」への分類の見直しが5月8日に見込まれているので、100万人超えを期待できる。宮古島の入域観光客数の増加を支えていたクルーズ船の来港も、2023年4月をめどに再開されるかもしれない。

コロナ禍で市内の大手15社の個別ホテルにおいては、2021年度は月ごとに20%から60%のあいだの稼働率であり、全体では26.53%から52.23%だったので、かなり経営に苦しんだようだ。2022年には全体で48.03%から65.68%に回復しているので、上の入域観光客数の増加にともなって、ホテルの稼働率も回復している。また沖縄県の補助金「観光事業者経営改善事業」6億5,000

万円を使って、一物件最大400万円で古い施設や設備を改修した。他にも観光庁の交付事業を用いて220の施設を改修している。これは、2023年の夏には、2018年や2019年程度の観光客が宮古島を訪れると仮定しての対策である。また、2018年や2019年に生じたオーバー・ツーリズムの対策として、バス路線の整備事業に20億円規模の事業を行う予定である。

2-3. 石垣市

2022年12月13日に、石垣市役所観光文化課で、石垣市の観光の現状と2022年の入域観光客数を尋ねた。2022年は10月までで737,481人となっており、2021年の545,831人を大きく上回っている。コロナ禍における入域観光客数の約3分の1となったような大幅な減少は見られなくなった。

2019年には1,471,691人の過去最多を記録したので、石垣観光は2021年には約3分の1に、2022年は約90万人と推計すると、2019年の約60%くらいの回復となる。2023年には、新型コロナウイルスの感染症法上の「2類相当」から「5類」への分類の見直しが5月8日に見込まれているので、130万人超えを期待できるだろう。

石垣市独自の新型コロナ感染症対策としての観光事業は、「石垣市あんしん島旅プレミアムパスポート制度」が2022年3月まで行われていた。この制度は、石垣空港でPCR検査または抗原検査の陰性がわかる証明書などを提示すると、石垣島市内のおよそ2から3割の施設で優待や割引が受けられるもので、国の臨時交付金2,500万円を用いて行われた。

クルーズ船も2022年10月に海外から200人規模を受け入れており、12月には国内路線のクルーズ船の寄港も予定している。ただ問題なのは、飲食店や土産店、タクシーやレンタカー輸送業の人員不足で、この問題が解消していない。ちなみに、このことは座間味村や宮古島市でも同様の問題となっている。

2-4. 離島観光の回復

座間味村や宮古島市、石垣市の記述で見たように、2022年の各離島観光はコロナ禍からの回復の年であった。入域観光客数の約半分となった座間味村、それぞれ過去最高値から同じく約3分の1に激減した宮古島市や石垣市は、それぞれは約4分3、3分の2、5分の3までに回復した。2023年は各離島で過去最高値に近づく可能性もある。

3. コロナ禍の県外観光地の事例

3-1. 東京都

2022年10月8日と9日と東京都を訪れた。筆者は旅行会社主催のバスツアーに参加して、東京スカイツリーと浅草神社で観光客の行動を観察した。2ヶ所とも日本人観光客が多く、賑わっていた。日本人観光客は、ほぼ全員がマスクを着用していた。日本政府は、外国人の入国者数を2022年6月1日から1日当たり上限を2万人に設定していた。日本を訪れた外国人観光客は



[画像1 ノーマスクの外国人観光客
2022.10.9 筆者撮影]

マスク着用義務を遵守しているかどうかを観察した。浅草では外国人専用のツアーでやってきた外国人は、画像1のようにノーマスクで動き回っていた。ほとんどの外国においては、この時期にはマスク着用義務はなくなっていた。

外国人観光客数について言えば、2019年に3,188万人の過去最高を記録したが、2022年には4月からの入国制限により411万人、2021年は25万人と激減した。2022年の10月11日からは、入国者健康確認システム（ERFS）における申請を求めないことと、パッケージツアーに限定する措置を解除し、個人旅行の解禁を行った。2023年は外国人観光客が大幅に回復する年になるだろう。

3-2. 宮崎県高千穂

2022年11月23日と24日に宮崎県高千穂地方を訪れた。交通の便があまりよくない地方の有名観光地がどのような状態かを調べるためである。高千穂には「天岩戸伝説」があり、日本有数の伝統芸能「神楽」が伝承される地域でもある。23日は天気に恵まれなかったが、高千穂神社は多くの参拝客の姿があった。また高千穂神社の「神話の高千穂夜神楽まつり」には、画像2のように多くの観光客が会場でマスクを着用して鑑賞していた。数人の白人の外国人観光客も見ることができた。



[画像2 高千穂夜神楽 2022.11.23 筆者撮影]

24日朝にはボートに乗って高千穂峡を遊覧した。朝から多くの観光客が列を成して訪れていた。ボート乗り場では、アルコールなどの消毒液による入念な除菌・殺菌が行われていた。2022年10月11日から始まった、旅行代金の40%相当が割引されるという全国旅行支援の影響もあったようだが、地方観光も復活しつつあると感じた。

4. 海外のビーチリゾートの状況

4-1. タイ王国サムイ島

タイ王国サムイ島には2022年6月9日から12日まで滞在した。まだ日本もタイもコロナ規制が厳しい時だった。タイ入国に際しては、英語で書かれたワクチン接種証明書か搭乗72時間以内のPCR検査陰性証明書が必要であり、日本への再入国の際には国外滞在場所で受けた搭乗72時間以内のPCR検査陰性証明書が必要であった。またタイ入国に際しては、2022年6月1日からは外国人旅行者のみに適用されるタイランドパス（THAILAND PASS）というスマホアプリをインストールし、タイ入国に際しては英語で書かれたワクチン接種証明書か搭乗72時間以内のPCR検査陰性証明書を事前登録しタイ行きの飛行機搭乗の際にはその画面を提示しなければならなかった。そして帰国の際には、日本政府の新型コロナワクチン接種証明書アプリをスマートフォンにインストールし、ワクチン接種証明書を読み取らせなければならなかった。ワクチン接種証明書を読み取りに成功すると、アプリの画面が赤から青に変わった。

また、現地タイでのPCR検査もたいへん手間がかかり、予約を取ってPCR検査を受けて、そ

して半日ほどたってからPCR検査結果を受け取りに行き、その証明書を日本政府が指定する様式に英語で医師が記入しなければならなかった。合計すると、PCR検査を受けてPCR検査結果を受け取るのに、丸1日がつぶれることになった。これは日本人観光客にとっては大きな負担であった。同時期にサムイ島を訪れていたドイツ人などは搭乗72時間以内のPCR検査陰性証明書がなく、他の外国人観光客は日本国がまだそれを必要としていることに驚いていた。

サムイ島行きの飛行機内では飛行機内では全員マスクを着用し、画像3のように到着して入国審査を受けるまではマスクを着用していたが、白人系の外国人はその手続きを終えると、マスクを外しておしゃべりをしていた。筆者も到着日とその翌日まではマスクを着用していたが、その後は外すようになった。サムイ島の道路でマスクをしているのは、病院やホテルなどに勤務している現地人で、現地のタイ人もマスクをしておらず、白人系の外国人観光客もマスクをしていなかった。この時期には、中国人観光客は見かけられず日本人観光客もほとんど来ていなかった。現地ツアーで会ったアジア人系の観光客は、「日本人」と偽って参加していた香港人のカップルであった。



〔画像3 タイ・サムイ空港の入国審査
2022.6.9 筆者撮影〕

サムイ島は、まだコロナ禍の影響下にあり、画像4のようにガラガラのショッピングモールや閉店した飲食店とコンビニなどを確認することができた。コロナ前は中国人観光客で溢れていたビーチやレストランも、少数の白人の観光客を見るだけであった。現地のダイビングツアーに参加したが、以前はライセンスを持ったファンダイビング客と持たない体験ダイビングの客とを分けていたはずであるが、参加人数が足りないのか、同じ船でツアーを行っていた。狭い船内は寿司詰め状態であったが、観光客もガイドも船員ももマスクを着用している人はいなかった。



〔画像4 タイ・サムイのショッピングモール
2022.6.10 筆者撮影〕

現地で10年以上日本人向けツアーガイドを務めている日本人女性に話をうかがった。彼女の話によると、新型コロナウイルスの感染症は2019年の12月にタイのサムイ島で流行していたらしい。当時、ガイド仲間が次々と高熱を患っていた。彼女自身もこの病気を患い、「死ぬ」と思ったらしい。2020年の2月に中国・武漢で新型コロナウイルスの感染症の大流行が起これると、「あれは新型コロナウイルスだったんだ」と思ったという。重要なことなので付記しておく。

帰国時には、東京羽田国際空港で、降機から再入国までの手続きに2時間ほどかかった。タイのバンコクから飛行機が到着すると、機内で30分ほど待たされた。一度に多数の飛行機から乗客が降り立つと現場が混乱するからだと考えられる。そして、次のようにグループごとに分けられた。新型コロナウイルス感染症に関して陰性か、いまだそれが分からない状態か、また日本人か外国人かで分かれる。日本政府の新型コロナワクチン接種証明書アプリで青色の画面を見せると、行き先を告げられ、対面テーブルでもう一度スマホ画面がチェックされ、紙の健康カードを渡されて、入国審査場に赴く。再入国審査は簡単に済んだので、新型コロナウイルス感染症に関する手続きに多くの時間を要した。2022年10月27日から11月1日までタイのプーケットに調査で訪れた際には、東京羽田国際空港にだいたい同じ時間に到着したが、到着から降機、新型コロナワクチン接種証明書アプリの画面の提示、日本への再入国審査を終えるまで、20分ほどしかかからなかったことを付記しておく。

4-2. アメリカ合衆国ハワイ州オアフ島

アメリカ合衆国ハワイ州オアフ島には2022年9月3日から8日まで滞在した。まだ日本国はコロナ規制が厳しい時だった。日本からの搭乗の際には、ワクチン接種証明書か搭乗72時間以内のPCR検査陰性証明書が必要であった。また、帰国に際しては、国外滞在場所で受けた搭乗72時間以内のPCR検査陰性証明書が必要であったが、9月7日から現地でのPCR検査陰性証明書の取得が必要なくなり、筆者は予約していたPCR検査をキャンセルした。もし検査が必要であったのならば、半日がつぶれてしまう予定であった。日本への入国時には、新型コロナワクチン接種証明書アプリの画面を提示して、紙の健康カードを渡されて再入国が30分ほど済み、スムーズに移動できた。



〔画像5〕 ハワイ・ワイキキビーチ
2022.9.6 筆者撮影

ハワイでは、観光客はノーマスク、通行人はノーマスク、ショップの店員もノーマスクで普段通りに活動していた。大型ショッピングモールのアラモアナセンターでは、マスクを着用している日本人観光客を見るくらいであった。しかし、すべての日本人がマスクを着用しているわけではなかった。ショップの店員も、マスクを着用している所と、していない所に分かれており、ノーマスクの方が多かった。日本人観光客が参加する1日ツアーでは、乗り合いバスの中では、日本人全員がマスクを着用していた。

また、ワイキキビーチはもともとそこにビーチがなかった場所に観光用に作られた人工ビーチ⁽²⁾であるが、画像5のように多くの白人と黒人系の観光客で賑わっていた。マスクを着用している人はおらず、ワイキキの狭いビーチは海水浴客でいっぱいであった。この時点で、かなりの

(2) URL記事「ワイキキビーチは人工砂浜！？拡張工事が完了」が参考になる。

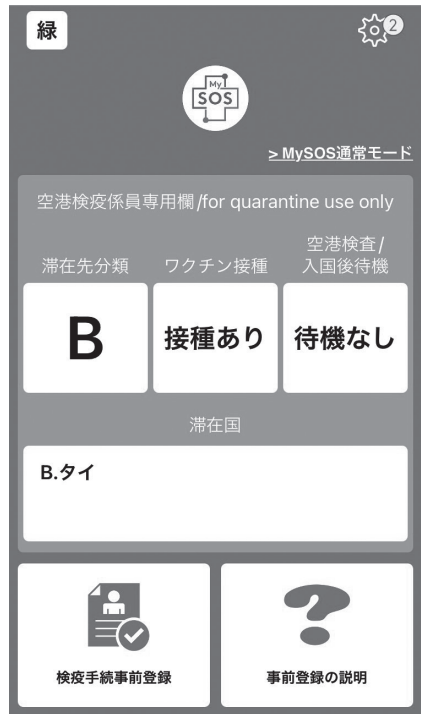
砂が流失しており、ビーチは狭くなっていた。

半日のツアーにも参加したが、日本人ガイドの話によると、アメリカ合衆国全体で3ヶ月間の非常事態宣言が出た2020年3月1日から5月31日までに出された外出禁止令で、週600ドルと失業手当（合計で日本円で30万円以上）が支給され、ハワイの人々は3ヶ月間みなリッチになったと聞いた。2022年9月の段階では、日本人観光客の戻りはまだ3分の1くらいようだ。日本人を含めて外国人観光客が増えつつある。ワイキキビーチの観光客はアメリカ人が多いと聞いた。まだ、諸外国でコロナ規制が異なっており、アメリカ人は国外よりも国内のハワイに集まってきているのだと聞いた。ホテルの予約状況も満室のホテルが現れており、料金も2020年2月初旬に訪れたときよりも高額（円安の影響もある）になっていた。

4-3. タイ王国プーケット

タイ王国プーケットには2022年10月27日から31日まで滞在した。通常プーケットは6月から10月までが雨季であるが、プーケットに行く前の10月16日には大洪水が起これり、その爪痕を旅行中に見ることになった。滞在の半分の日は雨にたたられた。タイ入国に際してはタイランドパスは停止されていたが、機内でのマスク着用が義務づけられていた。バンコクからプーケットに向かう便では、マスク着用は推奨されていたが、着用していない外国人観光客も見受けられた。日本国への再入国については、画像6のように緑色の新型コロナワクチン接種証明書アプリの画面を提示して、紙の健康カードを渡された。再入国が素早く行われ、コロナ感染症の検査場と入国審査を20分ほどで終えることができた。2022年6月には煩雑で時間と金銭を要したタイ入国と日本への再入国は空港の職員の「慣れ」もあってか、ほとんどストレスを感じないまでになっていた。

プーケットでマスクを着用していたのは送迎で使ったハイヤーの運転手ぐらいで、現地のタイ人もマスクを着用していなかった。また利用したホテルでも、オーナーと従業員はマスクをしていなかった。またバイクをレンタルしてプーケットの各ビーチを巡ってみたが、どのビーチも白人系の外国人が多くいて、賑わっていた。当然マスクをしているような感じもなく、



[画像6] 新型コロナワクチン接種証明書アプリの画面
2022.10.30 筆者撮影]



[画像7] ダイビングツアーの船内
2022.10.28 筆者撮影]

自由に動き回っていた。ダイビングツアーに参加したが、画像7のように船内でマスクを着用している者はおらず、「コロナ禍とはどの世界線かな?」という感じであった。別に参加した島巡りツアーでもマスクを着用している人はいなかった。コロナ禍で中国人観光客がタイには来られず、代わりに経済発展が著しいインドからの観光客が増えていた。筆者が乗った船は格安のものではなくしっかりとしたボートを利用していたが、乗船者の約8割がインド人という感じであった。

5. 沖縄離島観光の今後

海外の3つのビーチリゾートを調査して感じたことは、マスク着用義務とPCR検査陰性証明書やワクチン接種証明書の提示の煩わしさであった。タイのサムイ島とプーケット、ハワイのオアフ島に滞在していろいろ各地を見て回ったが、もう海外ではコロナ感染症対策でマスクを着用するという生活はなくなっていると感じた。実際に筆者も入国して1日目はマスク着用を心がけノーマスクには抵抗があったが、2日目からはノーマスクで過ごし、その快適さを味わった。日本への帰国便では、その登場の72時間前に新型コロナワクチン接種証明書を該当アプリのアップロードし、空港の検査場で青や緑の画面の提示して、ようやく入国審査にたどり着くというわずらさを感じた。同様のことは、訪日外国人観光客も感じていることだと考える。

これまで議論されてきた、新型コロナウイルスの感染症法上の「2類相当」から「5類」への分類の見直しが2023年5月8日に決定したことは、世界各国の対応から見て順当なことだと考える。

マスク着用義務についても、多くの日本人は1枚200円から500円のN95規格⁽³⁾のマスクを着用しているわけではない(不織布マスクを推奨)ので、海外の事例を見れば、その必要はないと考えている。筆者は、上記のビーチリゾートのショッピングモールや、ツアーの狭い混雑した車内や船内でノーマスクのままだったが、コロナウイルスの感染はなかった。

日本では2022年の冬に第8波で新規感染者数が1日に10万人、死亡者数が500人を超えている状況があったが、9割以上の日本人は屋外でマスクを着用していた。このマスク着用率で統計上世界一の感染者数と死亡者を数えている。マスクの着用率の高い日本でこれだけの感染者数と死亡者が出ていることについては考え直さなければならない。方法は二つある。一つはN95規格のマスクを義務づけ、コロナ禍初期に配布したマスクのように無料で手に入るようにすることである。もう一つはノーマスクで過ごすことを認めることである。筆者は世界の各国の対応を見るに、後者がよいと判断する。

上にみたように、海外では一部の国を除いて新型コロナウイルスの感染症対策は行われず、観光客は自由に動き回っている。筆者も海外では1日目と2日目くらいはマスク着用を心がけたが、それ以降はノーマスクで過ごしたが、感染はしなかった。タイ王国サムイ島では現地での陰性証明書が必要なためPCR検査を行い、後に検査結果を受け取らなければならない、丸1日を充てなければならなかった。このことは日本人観光客にとって大きな負担となっていた。アメリカ合衆国ハワイ州オアフ島では、現地でのPCR検査の予約を入れていたが、滞在期間中に入国72時間前

(3) 「N95規格とはNIOSHが制定した呼吸器防護具の規格基準であり、Nはnot resistant to oil 耐油性なしを表しています。95とは塩化ナトリウム(空力学的質量径 $0.3\mu\text{m}$)の捕集効率試験で95%以上捕集することを意味しています。つまりN95マスクは、 $5\mu\text{m}$ 以下の飛沫核に付着した病原体を捕集することができ、着用者の肺への病原体の進入を防ぐことができます」。URL記事「N95マスクの選び方・使い方」が参考になる。

までの現地でのPCR検査義務が外され、陰性証明書が必要なくなった。2022年9月7日以降にハワイを訪れる日本人観光客への負担が少なくなった。

また2022年10月と11月に日本国内で都心と地方の観光の状況も見たが、見る限りにおいて国内観光は復活しつつある。そして日本政府の全国旅行支援がこれを後押ししていると感じた。全国旅行支援中に支援を受けて国内旅行をしないのは「損である」という感じが漂い、コロナ禍で押さえつけられた旅行や観光への需要が爆発した感じがあった。筆者も2022年10月11日全国旅行支援の開始日に、予約サイトにアクセスしたなかなかつながらず、つながると当該地域の支援は上限に達したのか、受けられない状態だった。

新型コロナウイルスの感染症法上の「2類相当」から「5類」への分類の見直しが2023年5月8日に決定され、マスク着用について周囲からとやかく言われなくなるようになれば、日本国への外国人旅行者数は2019年程度に回復し、沖縄の、座間味村や宮古島、石垣島を中心とする離島観光も2018年や2019年に記録した過去最高人数に近づくか、それを上回るようになるのではないだろうか、筆者は推測している。

参考文献

- 圓田浩二, 2017, 「沖縄県竹富島におけるリゾート開発と環境保全に関する社会学的研究」『沖縄大学法経学部紀要』第26号, pp.1-10.
- 圓田浩二 2018 「沖縄県宮古島におけるクルーズ船観光の現状と地域社会の変容」『沖縄大学法経学部紀要』第28号, pp.25-38.
- 圓田浩二, 2019, 「国際観光地「宮古島」のための二つの挑戦ー下地島空港国際線旅客ターミナル整備事業と平良港国際クルーズ船拠点整備事業ー」『沖縄大学法経学部紀要』第30号, pp.1-10.
- 圓田浩二, 2020, 「ビーチリゾートの発見と発展と衰退に関する観光社会学的考察ー宮古島のビーチリゾートの未来を考えるー」『沖縄大学法経学部紀要』第32号, pp.23-37.
- 圓田浩二, 2022, 「コロナ禍における沖縄離島の感染症対策」『沖縄大学経法商学部紀要』第4号, pp.35-44.
- 圓田浩二, 2022, 『ダイビングのエスノグラフィーー沖縄の観光開発と自然保護ー』青弓社.

参照URL

- 「N95マスクの選び方・使い方」<https://www.safety.jrigoicp.org/ppe-3-usage-n95mask.html>
(2023.2.3参照)
- 「タイ入国に必須 タイランドパス (THAILAND PASS) 申請方法[6月30日最終更新]」
<https://pattayalife.net/archives/45567> (2023.2.3参照)
- 「ワイキキビーチは人工砂浜！？拡張工事が完了」
<https://www.hayaloha.com/h120527-waikiki-beach-extension/> (2023.2.3参照)